■カレント巻頭言９■

理想だけでは平和は生まれない

室舘（むろだて）　勲（いさお）
（株式会社 潮流社 代表取締役社長）

私の仕事の一つである若者へのリーダーシップ教育の中には、毎月１５０名ほどの大学生に対して、２時間の講義をする時間があります。さまざまな角度からリーダー教育をしていますが、９月初旬に開催した講義では広島、長崎への原子爆弾の投下や終戦記念日がある８月の翌月ということもあり、先の大戦をテーマに話す時間を設けました。歴史について話す機会は定期的に設けているため、周りの若者に比べれば知識のある学生も多いですが、初めて参加した学生の中には８月15日が何の日かを答えられない方もいて驚きました。

私から話を展開して若者に知識を得てもらうことも大切ですが、それ以上に自分自身で原子爆弾や戦争について考える機会にしてほしいと思い、少人数に分かれてディスカッションをおこないました。そして各班で話し合った内容を発表する時間を設けると、ほとんどの班の発表が「戦争は二度とあってはいけない」「原子爆弾は絶対に使われてはいけない」「戦争を経験した語り部がいなくなるから語り続けていかないといけない」といったお手本のような内容でした。

発表の内容は素晴らしいものだと思いますが、私は何か違和感を覚えて学生に次のような話をしました。「戦争の悲惨さを語り継いでいかなくてはいけないという意見は最もだと思います。異論はありません。しかし、語り継いでいくことは平和を手に入れることとイコールではないということを覚えておいてください」。

平和を語っているだけで平和が手に入るのであれば、ウクライナはロシアから侵略されなかったと思います。ウクライナがソ連から独立した時は千数百発の核兵器を保有していましたが、アメリカやロシアからの圧力もあり軍縮を余儀なくされ、核兵器を放棄した歴史があります。もし今でもウクライナが核兵器を保有していたら今回の戦争は起こったでしょうか。２０２３年時点で世界に９カ国の核保有国がありますが、核の保有が戦争の抑止力になっていることは明確です。古代ローマ帝国の格言に「汝平和を欲さば、戦への備えをせよ」というものがありますが、戦争を起こさないためには軍備増強をしたり外交をしたりという努力が必要です。

20年ほど前からお世話になっている拓殖大学国際日本文化研究所客員教授のペマ・ギャルポ先生は実際に故郷のチベットを中国の侵略で失いました。１９４９年に建国されて中華人民共和国とも友好条約を結び、国際社会で独立国として認められていたチベットですが、約束を破った中国によって領土を奪われてしまいました。「当時のチベットには約20万人の僧侶がいました。厳しい修行を重ね、平和を祈り続ける僧侶を国民は大変尊敬していました。しかし、侵略によってその多くが犠牲となり、７０００カ所あったとも言われるお寺も数カ所を残してほとんどが焼き払われてしまいました。中国人民解放軍に虐殺されたチベット国民は１２０万人にも及びます」。実際にチベットから日本に亡命したペマ先生のお話を伺うと、平和を願うだけでは国を失う可能性があると痛感させられます。

日本が１９４５年以降一度も戦争に巻き込まれていないのは、憲法９条のおかげではなく、日米同盟と世界中に未だに「神風」という強烈なインパクトを残している、勇気ある特攻隊の先人の方々の存在があってこそだと私は思います。彼らが日本のために自らの命を省みずに戦ってくれたからこそ、現代に至るまで「日本人を本気で怒らせてはいけない」という恐怖感を世界に与えてくれていると思っています。

「これからも平和を願ったり、悲惨な歴史を語り継いでいくことについては私も心から賛成です。しかし、平和であるために何をするべきなのか、これからの日本を担う君たちに、ぜひ具体的な行動まで考えて落とし込んでほしい」という話を大学生の皆さんにしたところ、非常に引き締まった顔つきになりました。

若者でも平和のためにできることはたくさんあります。経済的に強くならなければ防衛費の増額ができませんので、ビジネスマンとして活躍し経済を回すことも素晴らしいことにまもりです。一人の大人として、日本が好きな子どもを育てることも大切でしょう。経済と教育の両輪がしっかりしてはじめて、国益や国防という話ができると思います。もちろん、公務員として公のために働くことも、政治家になって国のために働くことも大切です。

誰しも戦争を望んではいません。平和な世の中が良いに決まっています。だからこそ自分はどういう形で日本を守るのか、行動ベースで考えてほしいと思います。私はこれからもあらゆる分野で日本を良くするために何ができるかを考え、行動できる若者を増やしていきます。

そして、その若者たちが次の世代にこの想いを繋いでいく未来をつくってまいります。

カレント年間購読はコチラ⇩